

人生は
決まり
文句

ずるがしこい奴ーティゲレ

窪田 暁

(くはた さとる)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

ドミニカ移民の街

ニューヨーク・マンハッタンの一五五丁目から北端までの地域をワシントンハイツとよぶ。ここでは五〇万人近いドミニカ共和国(以下ドミニカ)出身の人びとが暮らしている。街にはドミニカ料理店や家庭料理の食材を店先に並べたスーパー、故郷への送金を引き受ける店やドミニカ行き格安航空券をあつかう旅行代理店が軒を連ねており、屋号はすべてスペイン語で書かれている。

街を行きかう人びとは故郷での流儀にしたがい、知り合いとすれちがうたびに互いの名前を呼び合う「あいさつをかわす。『ラモン』『ペピン』とどうよ最近?』という具合に。一通りのあいさつをすますと、ロトくじで一儲けた話やドミノで小遣い稼ぎをしたとき、自分がいかにつきまわっていたかについて話し始める。そんなとき相手の相槌は決まって「Tigüere (ティゲレ)」である。

スペイン語辞書には載っていない単語だが、ドミニカ本国では頻繁に使われることばで、「ずるがしこい奴」「要領の良い奴」くらいの意味であろうか。国家の収入の多くを観光・送金といった外部からの資金に依存するドミニカでは、安定した仕事に恵まれず日銭を稼いで生活する人も多い。そのため日ごろから知り合いに仕事の口を紹介してもらったり、週末をのりきる幾ば

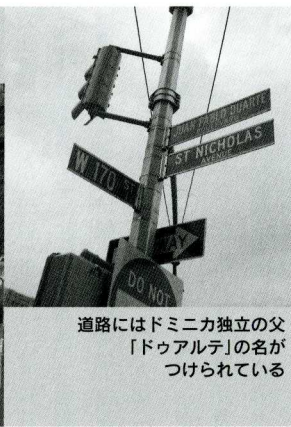
くかのお金を借りるため、最近アメリカで一旗あげて帰国した者はいないかななどの情報を集める。このように上手く立ち回る人も一般に「ティゲレ」と称される。このことばにはドミニカの庶民が生きていく知恵が凝縮されているのである。

故郷を繋ぎとめることば

ワシントンハイツの朝は静かだ。前夜の喧騒の疲れをひきずったまま職場に向か

道路にはドミニカ独立の父「ドゥアルテ」の名がつけられている

ドミニカ料理の食材を店先に並べたスーパー



う大人たち。近所の友たちがアパートから降りてくるのを待つ小学生。大通りに面した商店はシャッターを閉ざしたままで、開いているのは朝食を給するカフェくらいである。街が動き始めるのは朝一〇時をまわるころ。ドミニカ音楽のメレンゲやバチャータがとりに響きわたり、ドミニカの家庭料理を食べさせるレストランも開店する。そのなかの一軒をのぞいてみる。マングーにサラミをのせた定番メニューを食べっていると、そこに母親らしき人に連れられた二〇代なかばとおぼしき女性が入ってきた。店の主人との会話を聞いていると、どうやら共通の知り合いからの紹介で今日からこの店で働くことになっているらしい。ここにも移民先で生きていくために同郷のネットワークを駆使して立ち回る「ティゲレ」がいた。

母国を離れて外国で生活をしている人びとにとつて、ことばが自身のアイデンティティを確認する重要な役割をはたしていることはいまでもない。とりわけそのことばが母国特有のことばであればなおさらであろう。この「ティゲレ」ということばもそのなかのひとつであるが、さらに興味深いのはニューヨークにより良い生活を求めてやってきたドミニカ移民を総称することばとしてもあてはまることである。食事を終え助定を払う際に「高いね。もう少しまけてくれない?」と言ってみた。返ってきた答えは……。